

朝鮮民主主義人民共和国の地質調査報告記

平田 大二 (当館学芸員)

今年(1995年)の8月、朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮と略称します)国家科学院地質学研究所の招請を受け、朝鮮半島北部の地質と研究事情を見聞する機会を得ましたので、その概要をここに紹介します。

訪問の目的

最近の地球科学分野では、地球が誕生した約46億年前から約6億年前までのプレカンブリア時代の地球の歴史について、精力的に研究が進められています。この40億年もの長い間に、地球で何が起きたのか。そして、その後の地球の歴史にどのような影響をもたらしたか。たいへん興味深いテーマです。

今回の訪問も、このテーマの流れに沿うものです。私たちの目的は、アジア大陸東部の地質構造の解明と、朝鮮半島と日本列島との地質構造の比較をするための資料や学術データを、現地研究者との研究交流や、プレカンブリア時代と中・古生代の岩石類の現地調査により収集することにあります。

北朝鮮への入国

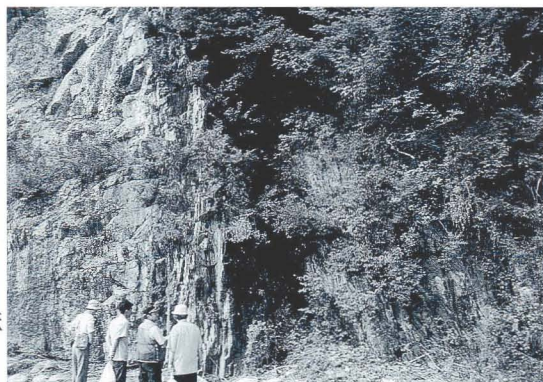
日本と国交がまだ樹立されていない北朝鮮への入国は、なかなか面倒です。一度、中国北京に入り、在北京朝鮮民主主義人民共和国大使館で入国査証を得た後、空路で平壤に入りました。

平壤空港では、見知らぬ国へ入る緊張感と、まだ耳慣れない言葉に戸惑いつつも、出迎えの案内係員の指示に従い、入国審査を無事終えることができました。空港からは、車で移動。夕闇の中、高速道路を走り、整然とビルが立ち



図1. 整然とビルが立ち並ぶ平壤市。

図2. 平安北道香山周辺の片麻岩類。



並ぶ平壤市内中心部を通り抜け、48階建てのホテルに到着した時は、「やっと着いた」という思いがしました。

研究交流の重要性

野外調査にさきがけて、研究交流を図るため、今回の招聘先である朝鮮国家科学院地質学研究所と、前回の訪問でもお世話になった金策工業大学地質学部を訪問しました。

地質学研究所は1961年に創立され、平壤市の北約30kmにある平安南道平城市の一角にあります。研究所の崔願禎副所長や白龍浚博士など十数名の研究者と懇談をしましたが、その際印象的であったのは、彼らが非常に研究熱心であり、諸外国との交流を強く望んでいる姿でした。一方、金策工業大学は1948年に創立した大学で、平壤市内にあります。ここでは、白樂興地質学部長と前地質学部長の金錫泰教授との懇談と、地質標本室を見学しました。ただ残念だったのは、いずれも研究施設を見学できなかったことです。移転作業中であったり、夏休み中であったりはしましたが、やはりお互いの研究環境や、問題点を理解し合うことが、交流を深めるうえで大切だと思います。

地質学研究所や金策工業大学での懇談では、朝鮮半島に分布するプレカンブリア時代の岩石の意義と、朝鮮半島と日本列島の地質構造の比較について議論が交わされました。その後も2回の研究協議が行われ、上記の問題を解決するうえで、半島北部に分布する岩石の詳細な地質調査と、岩石の年代測定の必要性を再確認しました。

貴重な野外調査

訪問前に、調査スケジュールについては調整済みのはずでしたが、実際にはなかなか思う様にはいきません。訪問直前、北朝鮮では記録的な集中豪雨があり、土砂崩れや洪水で交通手段が各所で遮断され、調査不可能となった地域もありました。

今回の野外調査は、崔願禎副所長と金錫泰教授に案内をしていただき、平安北道南浦市周辺の約20億年前のガーネット片麻岩類、平安北道香山周辺の約20億年前の眼球状片麻岩類、咸鏡北道開城市周辺の中、古生代の地層、そして38度線付近に露出する約29億年前の片麻岩類などを調査することができました。これらの岩石類については、共同研究計画として進行しています。

おわりに

研究交流や野外調査の合間に、故金日正主席の記念碑や博物館、板門店の軍事境界線など多くの施設も見学しました。ほんの一部なのでしょうが、北朝鮮の社会を覗き見た気がします。

今回の訪問は、日朝間にまだ国交がないことや、朝鮮半島の南北分断という現実、そして想像以上の悪天候の影響もあり、当初の目的を十分に達したとはいえません。しかし、受入関係諸機関の努力により、可能な限りの現地調査と研究協議の場をもてたことは、たいへん有益であったと思います。

最後になりましたが、今回の訪問に際して尽力をいただいた朝鮮国家科学院地質学研究所、金策工業大学、国家科学技術委員会、ならびに在日本朝鮮総連合会の方々にお礼を申し上げます。